

平成 31 年 3 月 1 日

平成 30 年度東洋学研究情報センター機関推進プロジェクト実施報告書（項目 1～6）

1. プロジェクト名 フィリピン・バナオ(ヴィヤナウ)語の民話：部族の記憶を記録する

2. 申請研究者 米野みちよ（新世代アジア研究部門 准教授）

（氏名）（所属・役職）

共同研究者

（氏名）（所属・役職）

a. Scott Magkachi Saboy (Nasser Vocational Training Center, Bahrain, Senior Lecturer)

b. Junley Lazaga (University of the Philippines Baguio, Cordillera Studies Center, Associate Professor)

c. Lawrence Reid (University of Hawai'i at Manoa, Professor Emeritus)

3. 研究期間平成 30 年 4 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日（1 年間）

4. プロジェクトの趣旨、全体計画（400 字程度）

フィリピン北部の山地に、「ヴィヤナウ（族）」（と呼ばれる人々）が点在して住む（人口約 1 万人）。申請者は、ヴィヤナウの長老らとともに、その移住の歴史、地名の由来等を記憶した民話 30 編を録音し、書き起こしと英訳を行った（トヨタ財団 D04-I-029; 代表 B. Panabang、故人）。その成果である未出版原稿“Banao Folk Tales: Territory, Migration and Ethnicity”（2006）は、ヴィヤナウ語の正書法の未整理などから出版に至っていない。

当企画は、2010 年代にヴィヤナウ語の辞書の編纂に携わってきた地元の若手研究者らとともに、未出版原稿を参考にしつつ、全面的に改訂する。新たに録音予定の 20 編を含む 50 編の民話の書き起こしと英訳を作成し、音声資料とともに、公開する。

語り部の逝去によって伝承が危ぶまれている民話を残すことに貢献する。また、従来の言語・民族区分には現れてこないヴィヤナウ族に焦点を当てることによって、民族の区分の問題に焦点を当てる。近隣の他の口承伝承（イフガオ州の Hudhud — 世界遺産、等）との比較研究も可能にする。

5. 今年度の研究実施状況（400 字程度）

① 6 月 11 日 ローレンス・リード氏（ハワイ大学名誉教授、フィリピン北部言語の世界的権威）とヴィヤナウ語の正書法に関する勉強会

② 8 月 12 日 スコット・サボイ氏（バナオ語辞書編さん）とヴィヤナウ語の正書法およびプロジェクトの進め方に関する打ち合わせおよびファイル共有

- ③ 10月8日 リード氏とヴィヤナウ語の正書法に関する勉強会
- ④ 1月14日-27日 ヴィヤナウ正書法、書き起こし原稿確認のワークショップ
- ⑤ データベース公開用のウェブページを作成した（近日中に成果の一部をウェブ公開予定）  
来年度の学会発表およびシンポジウムに向けて、フィリピン大学バギオ校ジュンレイ・ラサガ准教授とも連絡を取っている。

[独創的・先端的な学術研究を推進する特色ある研究活動]

現地出身の先住民の研究者および国際的な第一人者との国際共同研究である点、また、口承伝承の文化を、音声と文字の双方で記録し、インターネット公開を前提に整理した点で、独創的かつ先取的な取り組みであると自負している。フィリピン始めアジアやアフリカで急速に広まりつつある少数言語らを用いた母語教育奨励の機運に対しても、その功罪を含め、多角的で真摯な議論を喚起したい。

#### 6. 今年度の研究成果の概要（400字程度）

本プロジェクトによって、少なくとも単語レベルでは、ヴァナウ語の正書法をほぼ確立できたと考える。30編の民話の書き起こしと数回の修正稿を終了した（そのうち5編はほぼ最終稿として、年度内にインターネット公開予定）。

具体的には、a) [b]/[v]/[bf]/[bv]/[f]などと発音される音を”v”で統一、b) [j]/[dj]/[ch]などと発音される音を”j”で統一、c) [ya]/[ia]/[iyal]/[a]などと発音される音を[ya]で統一、d) 母音5音の確認と[u]と[o]の発音の規則性を確認、d) [l]の歯間側面接近音を[l̪]で統一、e) 二重母音の表記は原則ハイフンを入れることで統一、f) 声門閉鎖音は、後続する子音または母音の前にハイフンを入れることで統一、等々。これによって、プロジェクト開始時に“Banao”/「バナオ」と表記していた部族名・言語名を、現時点では、“Vyanaw”/「ヴィヤナウ」と表記することとしている。

来年度は、学会でのパネル発表、現地でのコンサルテーション、フィリピン大学バギオ校でのシンポジウムなども計画しており、そのための準備も行っている。